

自然公園における

サインの多言語対応について

株式会社 建設環境研究所 技術本部技師長 田中 隆

はじめに

わが国の「観光立国推進基本計画」では平成二八年の訪日外国人旅行者数二、五〇〇万人（平成二二年実績八六一万人）、訪日外国人消費動向調査の「大変満足」という回答割合四五％（平成二三年実績・四三・六％）を目標としている。

わが国の自然公園もこの目標の達成に大きく寄与できるが、それも訪日される方々への適切な対応があつてこそである。

しかし、日本人は外国の方とのコミュニケーションを苦手としていく人が多い。そこで、海外のお客様に必要な情報を提供する「外国語サイン」の活躍が期待されている。各地の官公庁も、多言語対

応に関する検討を進めているが、まさに時宜を得た施策であろう。

「おもてなし」の心

海外からのお客様を自然公園に迎えるにあたっては、「翻訳の誤り」や「誤植」はもちろん、「不自然な表現」さえもできるだけ回避したい。これは、このような誤り等が失礼に当たるとばかりでなく、サインへの不信感を起こさせ、その結果、満足度を低下させたり、*「ひとけ」*の少ない未知の山野に踏み入ることをためらわせたりするからである。

また、日本語表記に比べ外国語表記の分量があまりに少ないサインも外国の方にとっては不愉快なものであり、できるだけ避けたい。物理的サイン計画を語る前に、ま

ず「おもてなし」の心でサインを客観的に見るのが大事である。

多言語対応のサイン計画の留意点

(1) サインの種類

サインの種類には次のようなものがある。

ア. 記名標識（地名、公園名、施設名、コースの入口等）

イ. 案内標識（方向指示板、案内図、利用情報まで含んだ総合案内板、里程標（里程標は緊急時の位置通報にも使える。））

ウ. 解説標識（生物、地形、気候、歴史、風俗などの解説）

エ. 注意標識（危険周知、自然環境の保護、公序良俗の維持、利用規制）

オ. 掲示版（行事予定、ポスター掲示、季節限定の風物紹介、天候・危険周知）

カ. 境界標識

（詳細は環境省HP「自然公園等施設技術指針」第三部施設別技術指針第七章公共標識（サイン類）を参照された。）

(2) 多言語サイン計画の段階

多言語サイン計画には、①基本

計画・設計、②資料収集・内容制作・監修、③翻訳、④詳細設計・

板面制作の段階がある。「多言語対応」というと、とかく「翻訳」ばかりに注意を払いがちであるが、

「①基本計画・設計」の段階で、次のような事項をしっかりと検討しておく必要がある。

・告知・解説の対象・程度

・サインの位置・個数

・整備の優先度

・既往サインとの文字数のバランス・デザインの一貫性

・周辺団体との協力

(3) 多言語対応をする区域、範囲の検討

厳しい財政環境の中で効果的にサインを整備するためには、「多言語対応を行う範囲」として次のような事項を検討することが必要である。

・多言語対応する区域・ルートの範囲（例えば、長距離自然歩道の場合の主なサイン配置イメージは図1のようなものとされているが、自然歩道やその周辺を含めて、どこまでの範囲（集団施設地区内、駅、交差点……）

凡例	
	: 案内図標識
	: 誘導標識 (指導標)
	: 解説標識
	: 注意標識
	: 里程標

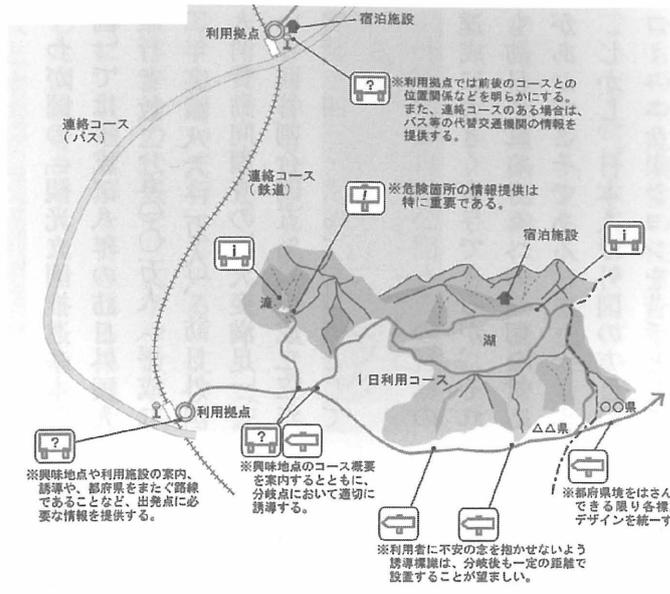


図1. 長距離自然歩道におけるサイン配置のイメージ(前述の環境省HPより部分引用)

- ・ 対応するかを検討する。
- ・ その中で多言語化の対象とするサイン
- ・ 多言語化の対象言語 (英語、中国語 (簡体字・繁体字)、韓国語)
- ・ 多言語化する内容

多言語サイン設計の実際

多言語サイン設計においては、以下のようなことに留意する必要があります。

- ① サインが設置される場の明確化
例えば、「緊急連絡先」という語には次の二つの意味がある。
ア. あなたに何か起こったとき連絡する先 (家族や知人の電話番号)
イ. 事故時に助けを求めるとき

- ② 国の慣習を理解しているネイティブ」と「わが国の技術者」が共同で取り組むことが必須である。
- ③ 必要に応じた丁寧な説明
「国民宿舎」や「国民公園」など、特別な意味をもつ言葉がある。「国民公園」は「国家公园」と訳すと「国立公園」がイメージされてしまう。多少くどくなるが、「国民公園 (由环境省管理、除都市公园、自然公园以外的公园)」と説明するほうが良い。カタカナの固有名詞がついた施設なども「どんなものか」適宜説明することが必要である。

- ④ 板面作成までの一貫性
折角、質の高いサイン板面設計ができて、工場製作の段階で文字のミスが発生する例が多い (写真1)。特にハンゲルの母音を表す部分の点の位置・有無は誤りやすいようである。最後まで、言語を分かる技術者、

ネイティブがチェックすることが必要である。

おわりに

多言語対応は、すべての段階について開発途上の技術である。自然公園等の現場の方々におかれては、海外の方々の声をくみ取っていただき、現場に生かしていただくとともに、さまざまなか機会にご教示いただければ幸いです。



写真1. 誤植の事例 (「任」の後に「可」が抜けている)。ネイティブが見れば一目で分かる。

田中 隆 ● たなか たかし
 (株)建設環境研究所 技術本部 (公園・景観・自然環境担当) 技師長。
 広島県生まれ。東京大学農学部卒業。元建設省土木研究所緑化生態研究室長。
 自然環境の紹介サインをはじめ、サイン計画に研究歴、業務実績を持つ。